

令和5年度

令和5年10月31日発行

SSHだより

第3号

(4期指定2年目)



東京都立日比谷高等学校

活動報告 1

SSH 国内派遣研修 北海道（旭川,三笠,札幌）

9月29日～31日に2泊3日の日程で、北海道研修が行われました

事前研修

北海道研修前に、2回的事前研修がありました。事前研修では地球史をたどって北海道の自然について考え、北海道の基本情報のおさらいや北海道の地理的な特徴について学びました。人間が生まれる前の出来事からの北海道の軌跡を学び、大昔に起こったことが東京とは全く違うであろう今の北海道の自然につながっていることを学びました。動物は？化石は？と植物だけでなく様々なことを地球史をたどることで考えました。ですが、私たちが学んだことは自然だけではありません。今回私たちが研修で主に学ぶのは植生や化石ですが、北海道の文化などについても学びました。ではここでクイズです。「俱知安」はなんと読むでしょう？

正解は「クッチャン」です。北海道の地名は先住民であるアイヌ民族の言葉がたくさん使われています。この俱知安もその一つです。そしてこれらの地名はその場所の自然（川や土地の特徴）に基づいてつけられることが多いのです。意外なところでも自然とのつながりがみられる北海道、その雄大な自然を自らの目で見る事ができる日に想いを馳せました。



当日の様子

海を越えて旭川空港に到着し、早速バスで旭岳に向かいました。途中で地質研究者の和田先生、鳥類研究者の磯先生と合流し、大雪山の形作った特徴的な地形や生態系について説明を受けながら見学をしました。それからロープウェイで急斜面を1600mまで一気に上がると外は6℃という寒さでしたが、高山植物や溶岩地形などを皆熱心に観察していました。2日目では三笠市立博物館にて化石など古生物学を中心に学びました。植物化石研究者の成田先生の講義を受けながら地層や植物なども観察し、古代に思いを馳せます。3日目は北海道大学の環境科学院にて大雪山の生態研究者、工藤先生に大雪山生態系の概要と温暖化の影響についての講義を受け、自然の捉え方そのものについても考えさせられることとなりました。北海道には、歴史があり、厳しい環境があり、それを乗り越える生き物たちがいて、まさに雄大そのものでした。各々様々な印象を受け、学びの姿勢も一段と主体的になったようです。ご尽力いただいた先生方や研究者の方々、全ての皆様に感謝申し上げます。

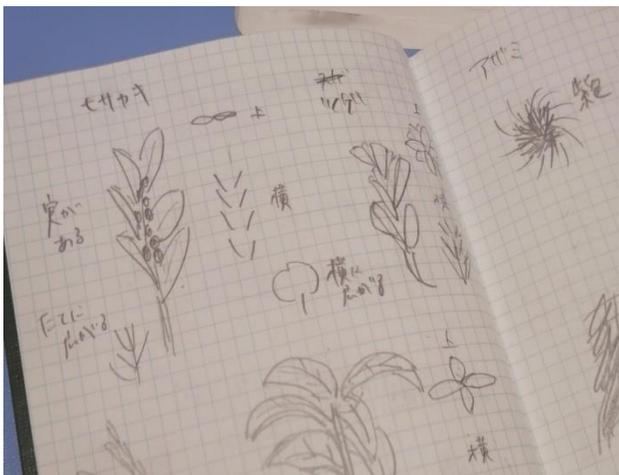
SSH 国内派遣研修 伊豆大島

10月14, 15日に1泊2日の日程で伊豆大島研修が行われました。

東京竹芝桟橋ターミナルからジェット船で約1時間45分。伊豆諸島の北端にある伊豆大島で1泊2日の実習がありました。実習テーマは主にふたつで、「自然災害」と「環境復元力」です。目の前に広がる雄大な景色の一つ一つに伊豆大島の成り立ち、植生の展開の過程を学ぶヒントがあり、事前学習で学んだことを実際に目で見て感じる事が出来るのは非常に貴重な経験となりました。



また、私たちはクロノシークエンスという方法で植生が荒地から森林へとどのように変遷していくのかを考えました。非常に長い時間を必要とする植生の再生は、幾度も噴火が起こっている伊豆大島では1度の噴火で影響を受けたところと受けなかったところに分かれるために、島全体で再生が進んでいるところとそうでないところがあり、それらを見ることで結果として再生の変遷をこの目で一度に見ることが出来るのです。



先生の解説を聞きながらバインダーとペンを持って火山生成物を見て回ります。時には全体を見通す大きな視点で、時には一つ一つを細かい部分を見る視点で、火山は私たちに地球の大きな営みの一部を感じさせてくれました。また、火山博物館へも訪れ、役所の方のお話を聞きながら噴火を災害という観点から学び、防災について考えを深めることが出来ました。



泊まった宿はとても立派なもので、最高の温泉と最高の食事により1日歩き回った体を完璧に癒してくれます。また、今回の実習では雨のため中止となりましたが、予定では周りに遮るものが無い環境で宿の屋上から星空観察をすることにもなっていました。学習会では先生から出されたふたつの課題についてグループで討議しました。テーマは「伊豆大島ではどのような過程を経て植物が遷移していったのか。」「火山の噴火による被害もあるなかで、それでもなおどうして人々は火山の周りに住むのか。」です。私が気付いた私にしか言えないこと、というものがグループの一人一人にあり、考えを伝え話し合い、ひとつの答えを出していくことはとても楽しく興味深かったです。

私は高校2年生で、今回のテーマとなる火山のことであったり、植物の変遷といったものは1年生のとき授業で習ったことでした。しかし、今回の学習はそのような机につき教科書を開くような座学では決して気付けなかったようなことを発見できるもので、改めてフィールドワークという実際に見て聞いて学ぶという学習の魅力を感じる事が出来ました。